ウメモト インフォメーション

２０２１年　１　月　８　日　　担当　小松

OPEC、12月は6カ月連続で増産 順守率8月以降で最低＝調査

［ロンドン　６日　ロイター］ - ロイター調査によると、石油輸出国機構（ＯＰＥＣ）の昨年１２月の原油生産量は、協調減産の除外国であるリビアの生産が一段と回復したことなどから日量２５５９万バレルと、前月から２８万バレル増加した。増加は６カ月連続。
減産順守率は９９％と、前月の１０２％から低下し、昨年８月以降で最低だった。

ＯＰＥＣにロシアなど非加盟産油国を加えた「ＯＰＥＣプラス」は、すでに今年１月の減産規模を日量５０万バレル縮小することで合意しているため、１月も引き続き生産量が拡大する見通し。５日の会議では、サウジアラビアが２、３月に産油量を追加で１００万バレル自主削減することを決めた。

コメルツバンクのアナリスト、カーステン・フリッシュ氏は「サウジの追加減産により、市場の供給過多は回避される見通し」と述べた。

リビアの生産量は日量１５万バレル増の同１２５万バレルで、伸びは一部アナリストらの予想を上回った。

アラブ首長国連邦（ＵＡＥ）の生産量は７万バレル増と、伸びは加盟国の中で最も高かったものの、減産順守率は１００％を超えた。

最大の石油輸出国サウジアラビアとクウェートの産油量は変わらずだった。

ウメモト インフォメーション

引用 ：日経／化学工業／燃料油脂／新聞展望／他（　　）

2021 年 1 月 8 日　担当者：若山

2～3月 協調減産 実質強化

サウジ100万バレル/日上乗せ表明で

OPECプラス 閣僚会合開く

OPEC（石油輸出国機構）加盟国およびロシアなど非加盟の産油国で構成するOPECプラスは5日、閣僚会合を開き、2月の協調減産量を1月から7・5万バレル/日緩和し712・5万バレル/日、3月はさらに7・5万バレル/日緩和し705万バレル/日とすることで合意した。

減産緩和分の7・5万バレル/日は2、3月ともロシアに6・5万バレル/日、カザフスタンに1万バレル/日割り当て、他の参加国の減産枠は1月水準を維持する。

またサウジアラビアは2、3月に100万バレル/日の自主減産実施を表明したといい、これを含めるとOPECプラス全体の減産量は1月の720万バレル/日に対し、2月は812・5万バレル/日、3月は805万バレル/日に実質的には強化される。

会合では、足元の原油市場がコロナワクチンや投資市場の改善に支えられていることを確認。一方で、引き続き新型コロナウイルス感染症が引き起こす需要の弱さ、乏しい精製マージン、余剰在庫の高さ、およびその他の不確実性に注意が必要と強調した。

今後も市場の動向を注意深く監視する必要性を再確認し、合同閣僚監視委員会を2月3日と3月3日に、閣僚会合を3月4日に開くことを決めた。

今回の会合は、1月に続いて2月も減産緩和を主張するロシアなどと、減産緩和に否定的なサウジアラビアなどとの意見調整に手間取り、当初予定より1日日延べして開かれた。

OPECプラスの会合を受けて、5日のニューヨーク市場ではWTI原油先物（期近・終値）が49ドル93セントに前日比2ドル31セント急上昇し、コロナ禍のもとでの最高値を更新した。

ウメモト インフォメーション

2021 年 1 月 8 日　担当者：岩崎

WTI原油50ドル乗せ
コロナ下初 11カ月ぶり高値

6日のニューヨーク市場で、WTI原油先物価格（期近・終値）が、前日比$1.70セント高の50ドル63セントに上昇した。新型コロナ禍のもとで、終値が50ドル台に回復するのは初めて。2月14日（51ドル43セント）以来、ほぼ11カ月ぶりの高値となった。

OPECプラスの減産方針やサウジアラビアの自主減産表明などを受けて、5日に2ドル31セントの急騰を示した流れを引き継いだ。昨年11月以降、コロナワクチンへの期待感などを背景に騰勢が強まり、10月30日の35ドル79セントから、約2カ月で41・5%上昇した。

昨年3月のOPECプラス協調体制の一時的解消、さらに新型コロナの世界的感染拡大を受けて、WTI先物が異例のマイナス価格をつけたのは4月20日だった。

その後はOPECプラスがより強力な協調減産に乗り出し、コロナ禍のもとでの経済活動が一定の安定感を取り戻したこともあって、油価は回復局面に入った。

ただ主要産油国間で、最低限必要とされる原油価格の水準が異なり、WTIの50ドル乗せは「いつかはクリアするが、それなりに高いハードル」（大手元売販売部門担当者）とみられていた。

50ドル乗せの一押しとしてはサウジの大胆な自主減産表明が大きいが、一連の騰勢の推進力はコロナワクチンへの期待感と世界的な金融緩和だ。2021年も油価回復のカギを、新型コロナが握る状況に変わりはない。

引用記事 ： 日本経済新聞 ・ 燃料油脂新聞 ・ 化学工業日報

ウメモト インフォメーション

2021年 1 月 8 日　担当 岩崎

食用油原料が高騰

国際価格 大豆、6年半ぶり高値

大豆や菜種など食用油原料の国際価格が軒並み高騰している。ラニーニャ現象による産地の天候不順やコロナ禍での労働者不足を背景に供給減の観測が広がる一方、主要消費国の中国の輸入は堅調で、需給が引き締まった。高値は当面続きそうで、国内の食用油価格にも影響しそうだ。

南米の天候不順影響

大豆は指標のシカゴ先物相場（期近）が1ブッシェル13・65ドル前後。2020年3月から66%上昇し、6年半ぶりの高値にある。

主産地のブラジルやアルゼンチンは、昨秋からラニーニャ現象による高温乾燥で作付けが遅れ、生産減の見方が強い。「ラニーニャは2月頃まで続く予想もある」（商社）といい、警戒感も強い。

米農務省は20年12月の需給報告でアルゼンチンの20～21年度生産量を5000万トンと前月から100万トン下方修正した。ブラジルは1億3300万トンと据え置いたが「来週発表の1月の報告で下方修正される可能性がある」（商品先物会社）。

大豆ミールなど大豆製品の最大輸出国のアルゼンチンでは昨年末に穀物検査員などのストライキが発生。現在も一部で継続していることも「強材料」（穀物コンサル会社グリーン・カウンティの大本尚之代表）だ。

キャノーラ油の原料となる菜種はウィニペグ先物（期近）が1トン644カナダドル前後。20年2月より44%高く、7年7カ月ぶり高値をつけている。最大輸出国カナダの統計局によると20～21年度の生産量は1872万トンの見通し。開花期が猛暑で前年度比4・5%減少すると見込む。

揚げ油やマーガリンに使うパーム油はマレーシア先物が1トン3877リンギ（約9万9600円）程度。20年5月の約2倍で、11年2月以来の高値。主産地マレーシアの悪天候やコロナによる外国人労働者の減少が響いた。

一方、世界の植物油消費の2割を占める中国では「需要が旺盛」（製油会社）だ。米農務省によると、中国の20～21年度の主な植物油の消費量は4109万トンと前年度比3%増の見通し。今年、共産党創設100年を迎える中国は「食糧安全保障の面から積極的な買いを進める」（資源・食糧問題研究所の柴田明夫代表）との指摘もある。

高値は当面続くとみられ、国内価格にも影響がでそうだ。マーガリンやマヨネーズに使う加工用食用油の大口価格交渉は10～12月期は値上げで決着したが「1～3月期も値上げを打ち出すことになるだろう」（穀物アナリスト）との見方がある。

昨年後半から急騰

南米の乾燥懸念で大豆は減産観測が広がる＝ロイター

引用記事　日経新聞　毎日新聞　化学工業日報　燃料油脂新聞